論　文

菅江真澄の見聞した民俗芸能

－とりわけ田楽を対象としつつ－

星　野　岳　義*

はじめに

菅江真澄の見聞した田楽につき，その梗概および論点を，明らかにしてみる。田楽とは，五穀豊穣の祈念に発する，民俗芸能の１つである。「民俗芸能研究の父」と讃えられる本田安次は，田儛や田遊びや田植踊りからなる領域と，田楽躍りや囃し田からなる領域と，御田植神事からなる領域に三分し［本田 1990: 4］，これが田楽研究の礎になっている。いっぽう，「民俗学の祖」と讃えられる菅江真澄は，その著作に多くの民俗芸能を記録した。このうち，神楽については体系的考察が済んでいるが［星野 2012: 187］，いまだ田楽にはそれが及んでいない。だから考察を施せば，真澄研究として欠缺を充足しうるのはもちろん，田楽研究としても近世後期の様相を捉えるものとなり，有益になるだろう。

それのみならず，菅江真澄のごとき文人にとって，近世後期の田楽研究が，いかなる位相を占めていたかを窺う，試金石ともなろう。およそ，近代以降における民俗芸能研究が，必ずしも平坦でなかったのは，公知の事実となっている。民俗学を唱道した，柳田国男は，芸能を技芸と表記するなどして，民俗芸能研究には慎重な立場をとった。本田安次も，早稲田大学教育学部の教授になったのが54歳，早稲田大学芸術功労者章を受章したのが89歳なので，遅咲きだったといえる。このような背景として，「民俗芸能は大学で講ずべき学問に非ず」という風潮があったことは［鳥越 1996: 1］，否定しがたいところである。ならば，菅江真澄は民俗芸能と，いかにして向き合ってきたのか，さらに田楽研究と神楽研究とで態度が異なるのか，が掌握できる機会となるだろう。

したがって本稿では，真澄遊覧記に描かれた民俗芸能のなかで，とりわけ田楽にまつわるものを，体系的に検討してみる。まず総説として，真澄遊覧記に描かれた田楽に対する，研究史を概観したい。そのうえで，真澄遊覧記のなかで取り上げられている田楽の，主要な記事を一覧にしていく。ついで各説として，田楽研究および真澄研究に臨んで，論点になると思われる題目を，５点ほど提起してみたい。このうち，４点は，机上の考覈になるが，さいごの１点は，かつて菅江真澄が見学した民俗芸能を，2012年に筆者が採訪したものになる。以上を顧みたうえで，本稿の問いに答えることで，結語

＊早稲田大学大学院社会科学研究科　修士課程２年

に代えたい。

1　総説

1―1　先行研究の傾向

真澄遊覧記に描かれた田楽は，歌謡研究と芸能研究の，２つの流れから取り組まれた。歌謡研究が順調だったのは，歌謡集『ひなの一ふし』が存在したという事情に尽きる。『ひなの一ふし』を吟味すれば，自ずと田植歌を吟味するものとなり，しかも神楽歌が数首しか掲載されていないのに比べれば，より田楽に有利だったといえる。郷土研究社刊『ひなの一ふし』では，柳田国男が付注を担当し，田植歌はもちろん，朳や弥十郎などに対して，解説が加えられた［菅江 1930: 付注12, 74, 77］。それ以降も，たびたび『ひなの一ふし』は翻刻され，また枚挙に遑ない論文が発表されたが，その道筋は柳田国男によって付けられていた，と看做しうる。歌謡研究が，『ひなの一ふし』の注釈から脱却して，日記の網羅的研究に移行するには，森山弘毅論文［森山 1992: 57］を待たねばならなかった。

いっぽう，芸能研究の場合，歌謡研究の『ひなの一ふし』に匹敵する，まとまった真澄遊覧記は伝存しない。おなじ民俗芸能でも神楽には，『ひなの遊び』1809年７月13日条があるのに対し，田楽でこれに相当するのは，『しののはぐさ』の「でんがく」くらいで，これも随筆のせいか注目されにくかった。詰まるところ，真澄遊覧記に点在する記事を，必要に応じて抽出する，という堅実な手法が採られた。このうち特筆すべきは，芸能分類を試みた金字塔として知られる，本田安次『図録日本の民俗芸能』であろう。同書には，田楽を図示したページがあり，『奥のてぶり』1794年１月15日条の，田植踊りの絵図が掲載されている［本田 1960: 42］。

かような個別事例の紹介から，網羅的研究に転換した画期として，『文学』誌上に連載された，浅野建二論文が挙げられる［浅野 1979a: 17］。ただ憾むらくは，歌謡研究者による芸能研究であったためか，真澄遊覧記の掲出順に叙述されており，神楽や田楽や風流といった，分類ごとに検証していないことである。このあとも，田植踊りなどに留意する研究はみえ，ことに門屋光昭論文は示唆に富んでいるが［門屋 1997: 51］，いずれも個別事例の注釈に終始するきらいがあった。かかる要因として，芸能研究者にとっては真澄研究に専念しがたく，真澄研究者にとっては芸能研究を会得しがたいため，適材が育たなかったとも考えられる。

既述によると，歌謡研究は『ひなの一ふし』を中心として，芸能研究は個別事例を中心として，おのおの進捗してきた。にもかかわらず，両研究には共通する傾向が，いくつか見出せるようである。第一に，取り組みやすい箇所から着手して，その箇所のみに終始してきたこと。このため，菅江真澄の特長といわれる，比較する眼差しを，十二分に究明するものとはならなかった。第二に，先行研究を調べて，自説を提示することが，稀薄だったこと。このため，知を蓄積することあたわず，一定期間を経過すれば，類似した学説が反復されがちだった。第三に，知が蓄積されないため，アプローチの仕方にも，限界が生じてきたこと。このため，ともすると成果は，現代語訳風に注釈すれば事足りる，という発想に帰着しやすかった。

1―2　真澄遊覧記にみえる田楽

真澄遊覧記に描かれた田楽につき，その方法は先行研究を踏まえず，ゆえに結論は月並みを脱しがたかった。この悪循環を絶ち切るには，どれほど田楽が真澄遊覧記に描かれているのか，それに対し先行研究は存在するのか，を洗い出す必要がある。出所を明示することは，本稿を肯定するにも否定するにも，その原点に立ち返りうるという意味で，公正な手続きを保障するものとなろう。これらは，学術の正道を反復したに過ぎないが，かかる基礎的な営為が，従来は等閑にされてきたのも事実である。

そこで本稿では，真澄遊覧記に描かれた田楽につき，全容を解明する足掛かりとし，かつ後進に索引の便を図るべく，不完全ながら記事を一覧にしてみる（表）。作表にあたっては，まず行を，未来社刊『菅江真澄全集』の巻数順に，実施場所ごとに抽出する。つぎに列として，当該場所の田楽にまつわる語彙，当該場所の真澄遊覧記の出所，それに対する先行研究を付した。場所の特定できるものは，文献を引用している件でも，採用することにした。ゆえに反対に，『太平記』［菅江 1974: 331］や高田与清『擁書漫筆』［菅江 1980: 72］のように，引用文中から場所が特定できないものは，この限りでない。もとより，水田で歌われる田植歌などは，境内で歌われる神楽歌などに比べれば，厳密には場所が特定できないことに，諒承を要しよう。

それから，実施場所にまつわり配慮すべき事項として，仙台なる地名を挙げることができる。菅江真澄が，仙台で民俗芸能を見学した，と追想している件は，田楽のみならず神楽にも確認できる［菅江 1973a: 173］。ここにいう仙台を，陸奥国宮城郡仙台城下に比定するのは素直といえ，宮城郡での日記『月の松島』などが未発見であるのも，かかる解釈を円滑にしていると思われる。たしかに，神楽には「仙台神楽」という現代語訳が充てられており［菅江 1968: 48］，神楽の一般的な命名法からすれば，仙台城下を指しているような印象も受けかねない。

しかるに，菅江真澄にとっての仙台が，仙台城下に限定されないらしいとは，真澄遊覧記を瞥見すれば容易に把握できる。具体例を挙げると，『かたい袋』前篇のなかに，「南部，仙台のさかひにて」［菅江 1974: 467］とみえる。ここにいう仙台は，仙台藩領と解釈すべきであって，田植踊りに即すると，『奥のてぶり』1794年１月15日条が問題になってくる。

ゑんぶりすりをここにて藤九郎といひ，仙台にてはやん十郎といふ。［菅江 1971a: 202図］

この一節にみえる仙台を，仙台藩領，とりわけ陸奥国胆沢郡小山村の徳岡集落に比定する，先行研究が散見される［門屋 1997: 53; 田口2002: 80］。たしかに，菅江真澄は徳岡集落で弥十郎を実見しているし［菅江 1971a: 334］，弥十郎も仙台藩領に分布していた［新井 1981: 55］。しかし菅江真澄は，仙台藩領でないはずの陸奥国三戸郡八戸城下でも，弥十郎が登場するかのような表現をしている［菅江 1973b: 331］。したがって，真澄遊覧記にみえる仙台から，特定の地域を絞り込むのは，まことに困難というほかない。本稿としては，両論併記の立場を採りつつ，しかるべき時機に，抜本的な見直しを推奨するものである。

田楽にまつわる語彙は，原文の表記を尊重し

表　真澄遊覧記にみえる田楽

実施場所	田楽にまつわる語彙	真澄遊覧記		先行研究
		タイトル	出所	
信濃国伊那郡殿島村付近	田歌，田植歌，田植えの祝い	『伊那の中路』1783年5月12日条，15日条 『ひなの一ふし』 『筆のまにまに』9巻	菅江1971a: 22，23。菅江1973b: 311。菅江1974: 250	森山1990: 44。森山1993: 19-25。門屋1997: 54
信濃国諏訪郡下原村	鳥追い	『諏訪の海』1784年1月15日条	菅江1971a: 113	森山1990: 45。田口2002: 28
信濃国筑摩郡本洗馬村	歌う，田草を取る，早乙女	『諏訪の海』1784年4月条 『庵の春秋』1784年6月条	菅江1971a: 136。菅江1974: 256	森山1992: 43
出羽国由利郡塩越村（象潟）	歌，田子	『秋田のかりね』1784年9月27日条 『筆のまにまに』4巻	菅江1971a: 205。菅江1974: 114	森山1990: 46。森山1992: 42
出羽国雄勝郡湯沢村付近	田結び，鳥追い	『小野のふるさと』1785年1月15日条	菅江1971a: 238	柳田1928: 37。直江1979: 4。稲1991: 15-16。小作1994: 32。赤坂2002: 319
出羽国雄勝郡岩崎村	春田を打つ，追い上げ	『小野のふるさと』1785年3月16日-18日条	菅江1971a: 245	森山1990: 47
陸奥国胆沢郡小山村（徳岡集落）	田植踊り，雪中田植え，歌い踊る，机，鳥追い，猿追い，鹿追い，藤九郎，弥十郎	『かすむ駒形』1786年1月11日-12日条，15日-16日条，18日条，2月14日条 『津軽の奥』1796年1月15日条	菅江1971a: 330-335，355。菅江1972: 53-54	柳田1928: 44。直江1979: 4-5。浅野1979a: 28。門屋1997: 51-52。森山1990: 49-50。小作1994: 32-33。赤坂2002: 308，319。田口2002: 29，77。菊地2011a: 93。菊地2011b: 66-67
陸奥国胆沢郡前沢村	鳥追い	『かすむ駒形』1786年1月16日条	菅江1971a: 334	森山1990: 49。田口2002: 29
陸奥国磐井郡中尊寺村（中尊寺延年）	田楽，編木，編笠	『かすむ駒形』1786年1月20日条 『はしわの若葉』1786年4月9日条 『筆のまにまに』2巻 『しののはぐさ』	菅江1971a: 338，372。菅江1974: 55，331	
陸奥国磐井郡平泉村（毛越寺延年）	田楽，編木，編笠	『かすむ駒形』1786年1月20日条 『しののはぐさ』	菅江1971a: 347。菅江1974: 331	浅野1979b: 101。松尾2005: 80
陸奥国磐井郡下折壁村（室根山）	歌う，手を打つ，田草を取る	『はしわの若葉』1786年6月25日条	菅江1971a: 401	
陸奥国北郡田名部村（南部糠部郡）	田歌，田植歌，田植踊り，机，藤九郎，弥十郎，早乙女	『牧の冬枯』1792年12月30日条 『奥のてぶり』1794年1月15日-16日条 『すすきのいでゆ』1803年1月9日条 『月の出羽路』仙北郡1 『ひなの一ふし』 『花の真寒泉』	菅江1971a: 303，435-436，202図。菅江1972: 374。菅江1978: 27。菅江1973b: 328，332-333。菅江1974: 267	中道1928: 75。柳田1928: 50。志田1937: 48。浅野1979a: 29。森山1990: 59-60。森山1992: 44。本田1995: 44-45。門屋1997: 53-54。田口2002: 79-80
陸奥国宮城郡仙台城下（仙台藩領）	田植踊り，机，弥十郎	『奥のてぶり』1794年1月15日条 『雪の出羽路』平鹿郡4 『ひなの一ふし』	菅江1971a: 202図。菅江1976: 153。菅江1973b: 332，334	浅野1979a: 29。森山1990: 60。門屋1997: 53-54
陸奥国北郡田屋村	田歌，稲田，稗田	『奥のうらうら』1793年5月19日-20日条	菅江1971a: 336	
陸奥国津軽郡平川村	田植え，鼓を打つ	『津軽の奥』1795年3月23日条	菅江1972: 13	
陸奥国津軽郡土屋村付近	雪中田植え，唱える，鳥追い	『津軽の奥』1796年1月15日-16日条	菅江1972: 53-54	柳田1928: 51-53。森山1991: 28。赤坂2002: 308。田口2002: 29
陸奥国津軽郡水木村	田歌	『津軽の奥』1796年3月26日条	菅江1972: 78	
陸奥国津軽郡早瀬野村	田植え，歌う	『すみかの山』1796年5月18日条	菅江1972: 117	

陸奥国津軽郡高根村（大日如来堂）	田植え，法楽，広矛	『外浜奇勝』1796 年 6 月 22 日条	菅江 1972: 136。菅江 1981: 92	
陸奥国津軽郡宮館村	田植え，さなぶり餅	『外浜奇勝』1798 年 5 月 10 日条	菅江 1972: 166	
陸奥国津軽郡深浦村	田植えの試し	『津軽のをち』1797 年 1 月 14 日条	菅江 1972: 220	
陸奥国津軽郡常盤坂村	歌う，植え渡す，菅笠，田子	『津軽のをち』1797 年 5 月 17 日条	菅江 1972: 235	
陸奥国津軽郡小湊村	雪中田植え，机，鳥追い，藤九郎，早乙女	『津軽のつと』1798 年 1 月 14 日 -15 日条	菅江 1972: 254，393 図，395 図	浅野 1980a: 95。小作 1994: 33。赤坂 2002: 308-309。田口 2002: 72。菊地 2011a: 99-100
陸奥国津軽郡鰺ケ沢町	田面，歌う	『錦の浜』1801 年 8 月 28 日条	菅江 1972: 287	
摂津国住吉郡住吉村（住吉大社）	御田植神事，花笠，遊女，植女	『雪の道奥雪の出羽路』1801 年 11 月 10 日条『つゆの塵束』	菅江 1972: 309。菅江 1980: 325	
出羽国秋田郡大滝村	雪中田植え，机，押付舞，筍舞，鳥追い，さなぶり団子，藤九郎	『すすきのいでゆ』1803 年 1 月 8 日 - 9 日条, 15 日条，2 月 8 日条	菅江 1972: 373-375，378	青柳 1978: 33。直江 1979: 5。浅野 1980a: 102。森山 1991: 35。小作 1994: 27。赤坂 2002: 309，319。田口 2002: 31
出羽国秋田郡達子村	田歌，田植笠，早乙女	『すすきのいでゆ』1803 年 2 月 21 日条，3 月 1 日条	菅江 1972: 386-387	
出羽国秋田郡湯野代村	田面，田植酒，歌う，鳥を追う，早乙女	『すすきのいでゆ』1803 年 3 月 4 日条	菅江 1972: 394	
出羽国山本郡強坂村	田植えの祝い，早乙女	『おがらの滝』1807 年 4 月 20 日条	菅江 1973a: 124	
出羽国山本郡長面村（季忌宮斎う神籬）	田歌	『おがらの滝』1807 年 5 月 5 日条	菅江 1973a: 130	青柳 1978: 34
出羽国秋田郡谷地中村	田歌，田植えの祝い，雪中田植え，鳥追い，早乙女	『氷魚の村君』1810 年 1 月 11 日条，15 日 -16 日条	菅江 1973a: 189-190，773 図	柳田 1928: 57。青柳 1978: 34。森山 1991: 43-44。野本 1993: 23-44。小作 1994: 31。赤坂 2002: 309，319。田口 2002: 31，74
出羽国山本郡大内田村	鳥追い	『氷魚の村君』1810 年 1 月 16 日条	菅江 1973a: 190	森山 1991: 44。森山 1997: 33-34。赤坂 2002: 320。田口 2002: 31
出羽国秋田郡南平沢村付近	田植え，歌う，舞う，さなぶり	『男鹿の鈴風』1810 年 5 月条	菅江 1973a: 225	青柳 1978: 34。浅野 1980b: 60。森山 1991: 44
出羽国秋田郡岩瀬村	田植えの試し	『軒の山吹』1811 年 4 月条	菅江 1973a: 268	
陸奥国津軽郡	田歌，田植歌，田植えの試し，歌う，机	『軒の山吹』1811 年 4 月条『ひなの一ふし』『錦木雑葉集』	菅江 1973a: 268，927 図。菅江 1973b: 325，328-329。菅江 1981: 13	浅野 1979b: 99。門屋 1997: 54
出羽国秋田郡天王村	田植えの試し，田長，早乙女	『軒の山吹』1811 年 4 月条	菅江 1973a: 268	
出羽国秋田郡塩口村	田植えの試し，田長，早乙女	『軒の山吹』1811 年 4 月条	菅江 1973a: 268	
常陸国久慈郡上宮河内村（西金砂神社）	田楽，大祭礼，小祭礼	『軒の山吹』1811 年 5 月条『筆のまにまに』8 巻『しののはぐさ』	菅江 1973a: 269。菅江 1974: 226-227，331	
出羽国秋田郡小泉村	田植歌	『軒の山吹』1811 年 6 月 4 日条	菅江 1973a: 941 図	
出羽国雄勝郡中山村（田神の社）	田植祭，田種祭	『雪の出羽路』雄勝郡 1	菅江 1975: 80	
信濃国	田植歌	『雪の出羽路』平鹿郡 3	菅江 1976: 105	
近江国栗太郡矢橋村	田楽，机，白装束	『雪の出羽路』平鹿郡 13『風の落葉』4	菅江 1976: 541-542。菅江 1980: 163	
陸奥国宮城郡塩竈村	田歌，少女	『雪の出羽路』平鹿郡 14	菅江 1976: 599	

出羽国仙北郡 （井ノ口廃村）	田植え，早乙女	『月の出羽路』仙北郡２下	菅江 1978: 135	
陸奥国栗原郡小迫村 （小迫延年）	田楽，田楽法師，編木，編笠，花笠	『月の出羽路』仙北郡４ 『しののはぐさ』 『かすむ駒形続』1786 年３月３日	菅江 1978: 141。菅江 1974: 331。菅江 1981: 28	森山 1992: 53-54。田口 1999: 169。田口 2002: 236
出羽国仙北郡神宮寺村	田植え，餌刺舞，刺捕舞，鳥追い	『月の出羽路』仙北郡５ 『椎の葉』	菅江 1978: 181-182，627 図。菅江 1980: 242	森山 1991: 48。稲 1991: 20-22
出羽国仙北郡高関下郷村 （神明社）	御田植神事	『月の出羽路』仙北郡７	菅江 1978: 244	森山 1991: 49
伊勢国度会郡岡本町 （豊宮崎）	御田植神事	『月の出羽路』仙北郡７	菅江 1978: 244	森山 1991: 49
出羽国仙北郡高関下郷村	田歌，田植え，机，田長	『月の出羽路』仙北郡７	菅江 1978: 659 図 -660 図	
出羽国仙北郡六郷高野村	鳥追い，鳥追い小屋	『月の出羽路』仙北郡 16	菅江 1979: 806 図	森山 1991: 50。稲 1991: 20-22。田口 2002: 27。後藤 2012: 62-63
近江国滋賀郡上坂本村 （日吉大社）	田楽，山法師，獅子頭	『月の出羽路』仙北郡 16 『筆のまにまに』６巻 『しののはぐさ』 『風の落葉』３，４	菅江 1979: 807 図。菅江 1974: 173，331。菅江 1980: 70，117	
出羽国秋田郡搦田村	田歌，田植歌，早乙女	『花の出羽路』松藤日記	菅江 1979: 333	
出羽国雄勝郡	田植え，鳥追い，鳥追い菓子	『凡国異器』	菅江 1973b: 116 図	
陸奥国三戸郡八戸城下	田植歌，田植踊り，田植踊りの器，机，藤九郎，弥十郎	『凡国奇器』 『ひなの一ふし』	菅江 1973b: 149 図，331-332。	門屋 1997: 54。菊地 2011a: 92，96
美濃国	田植歌	『ひなの一ふし』	菅江 1973b: 309	門屋 1997: 54
越後国蒲原郡	田植歌	『ひなの一ふし』	菅江 1973b: 314	小林 1940: 30-31。内田 1953: 9。渋谷 1953: 25。森山 1996: 2-6。門屋 1997: 54
出羽国秋田郡久保田城下	田歌，コウロギ	『ひなの一ふし』 『無題雑葉集』	菅江 1973b: 317。菅江 1981: 84 図	森山 1997: 9-23
出羽国秋田郡小又村	鳥追い	『ひなの一ふし』	菅江 1973b: 318	森山 1997: 23-33。田口 2002: 30
陸奥国北郡七戸村	田植歌	『ひなの一ふし』	菅江 1973b: 333	浅野 1980b: 60。門屋 1997: 54
出羽国秋田郡船越村	田植歌，船歌	『筆のまにまに』１巻 『椎の葉』	菅江 1974: 14。菅江 1980: 241-242	
三河国加茂郡渋川村	田植え，田舞，歌う，編木，説経，三線浄瑠璃，早乙女	『筆のまにまに』１巻，４巻 『しののはぐさ』	菅江 1974: 27，112，331-332	
伊勢国度会郡宇治町 （伊勢神宮内宮）	田植え，田舞奉仕	『筆のまにまに』４巻	菅江 1974: 112	
三河国加茂郡上野山村	田植え，田舞，編木，説経，三線浄瑠璃	『筆のまにまに』４巻 『しののはぐさ』	菅江 1974: 112，331-332	
三河国加茂郡寺部村	田植え，田舞，編木，説経，三線浄瑠璃	『筆のまにまに』４巻	菅江 1974: 112	
近江国滋賀郡大津町 （長等山園城寺）	編木	『筆のまにまに』４巻 『しののはぐさ』	菅江 1974: 112，331	
山城国葛野郡 （平安京）	田楽，編木，高足，腰鼓，銅拍子	『しののはぐさ』	菅江 1974: 331	
信濃国佐久郡志賀村	田楽屋敷	『しののはぐさ』	菅江 1974: 331	
陸奥国および出羽国	田植歌，植女	『風の落葉』6	菅江 1980: 206	森山 1992: 49
出羽国秋田郡中津又村 （住吉大神）	田祭り	『雪の山越』12 月 19 日条	菅江 1980: 441	
出羽国河辺郡桜村	田植え，早乙女	『筆のしがらみ』	菅江 1980: 500	
出羽国秋田郡長野町	田歌，植女	『筆のしがらみ』	菅江 1980: 501	
陸奥国本吉郡気仙沼本郷	田植え，物食う試し	『はしわの若葉続』1786 年 8 月 1 日条	菅江 1981: 49	
信濃国更級郡付近	田植歌	断簡 47 号	菅江 1981: 160	

つつも，「ううる」を田植えに，「早丁女」を早乙女にするなど，若干の修正をくわえている。鳥追いというものは，民俗行事であっても民俗芸能とはいいがたいが，田楽を考察するうえで有益であるので，便宜的に収載した。この一覧表から指摘できるのは，日記に頻出する田植歌が，地誌には掲載されにくい，ということである。この視野を，田植歌から田楽全般へと拡大したとしても，なお地誌に豊富な記事があるとはいいがたい。むろん，それぞれに興味深い叙述があるから，以下に５点ほど題目を挙げることで，ささやかな論点整理としたい。

２　各説

２―１　空白の旅を埋める民俗芸能

菅江真澄の終焉が明らかでないのと同様に，その出自についても審らかとしない。三河国額田郡岡崎城下や三河国渥美郡吉田城下に所縁が深いとみせかけて，三河国でなく尾張国に居住していた［菅江 1980: 478］，とはぐらかしているから真実を告げる意思がなかったのだろう。いわゆる菅江真澄の故郷探しは，多彩な学者が多様な仮説を提唱したにもかかわらず，定論といえる結末に辿り着かなかった。そうした状況ながら，在郷時代の菅江真澄が，はやくから近隣諸国を旅していたことが解明されたのは，収穫であったといえる。しかも，その近隣諸国にまつわる知見が，民俗芸能に暈取られているのは，より刮目されてしかるべきと思われる。

たとえば，菅江真澄が伊勢国周辺に所縁をもっていた，という学説は内田武志によって唱えられてきた［菅江 1974: 568; 内田 1977: 58］。『月の出羽路』仙北郡７は，出羽国仙北郡高関下郷村の神明宮における御田植神事を紹介したおり，伊勢国の御田植神事を引証として，不一致の多いことを指摘したものである。

伊勢にては五月に吉日を撰りて御田扇さしかざし，また「棒ふるふる戴ケ戴ケ，神田やさんぼう」と，ふりもてありく御田植の御神事に稲田の露斗も似るべうもあらざゝめれど…［菅江 1978: 244］

真澄遊覧記では，文献を引用した場合，直近に出所を明示するが，前掲にはそれが見当たらない。ただし菅江真澄は，蔀関月『伊勢参宮名所図会』を披見していて［菅江 1973b: 263図］，そのなかにも，同一の御田植神事が収載されていた。とすると菅江真澄は，伊勢国で御田植神事を見学したのではなく，文献から着想を得ただけ，という可能性も捨て切れない。もっとも，『伊勢参宮名所図会』巻４で「御田」とするところ［蔀 1919: 338］，『月の出羽路』仙北郡７では「神田」としており，その詞章には若干の異同がある。

いずれにせよ菅江真澄が，故郷を出発した以後に，故郷を出発する以前の民俗芸能を，回顧していたことに疑義はない。それが，もっとも明快に見て取れる例として，『筆のまにまに』４巻を挙げることができる。

おのれ考ふに，三河ノ国衣ノ里寺部ノ里なゝどにて，田ううるとき，編木とて俳優めけるもの，節経といふものをうたひありきて…［菅江 1974: 112］

三河国は，語りものが盛んであるが，田植えに浄瑠璃が結びついていた，という追憶になる。この一節にみえる，三河国加茂郡挙母城下

の付近というのが，加茂郡上野山村や加茂郡渋川村を想定したものであるのは，『しののはぐさ』で再説しているため把握できる［菅江 1974: 331］。なお，在郷時代の菅江真澄は，遠江国に分布するヒヨンドリにつき，伝え聞く機会があったらしい［菅江 1974: 468］。ヒヨンドリは，田遊びとしても歌垣としても取り組みうるが，ここでは後者の視座から，風流のなかの小歌踊りとみて別稿で扱うものとする。

ところで，菅江真澄が美濃国を経由して，信濃国に至るまでの日記は，白波に打ち取られてしまったのでない，と菅江真澄本人が証言している［菅江 1971a: 12］。ここにいう白波が，口実であったかにつき諸説あるが，いずれにせよ美濃国における動静は，ほとんど分からない。にもかかわらず，『ひなの一ふし』のなかには，美濃国の田植歌が収録されていた［菅江 1973b: 309。なお，内田 1977: 102］。さらに，『しののはぐさ』には，「今信濃国佐久郡志賀村（佐久市）に田楽屋鋪あり」［菅江 1974: 331］として，現存する日記には見出せない名所が紹介されている。同様に，日記『高志の長浜』が存在したという［菅江 1981: 137］，越後国においても，田植歌に耳を傾けていたと分かる。

加次のこちらかたの五十公嶺のむかふの，小松ならびの長良の土堤で，ならぬ梨子の木にむたばなさいて，人がとふたらなるといへ。［菅江 1973b: 314］

これは『ひなの一ふし』のうち，「越呉の国田殖宇多」と題する歌詞になる。田植歌や鳥追歌には，難解な歌詞が少なくなく，この田植歌も例外ではない。そうであるにせよ，加地荘や五十公野丘陵といった地名が拾い出せるため，越後国蒲原郡に関係するという解釈に，異見はみえない［渋谷 1953: 25］。田植歌の歌われる季節が限定される，という一般論に立脚するならば，かかる季節に菅江真澄は，蒲原郡を旅していたことになろう［なお，森山 2002: 40］。

このように，日記が欠落している時期を，民俗芸能から跡づけるという手法は，先行研究において多用されてこなかった。たしかに，跡づける素材は，地誌や随筆といった傍証史料になるから，取り扱いには慎重であらねばならない。これを敷衍すれば，奥羽地方に滞在する菅江真澄が，その時点から遡行して，言及するに支障のない談柄を，取捨した残滓であるといえる。それは取りも直さず，菅江真澄が若年期も老年期も，変わることなく民俗芸能を探求し続けた，証左にもなるはずである。

２―２　田植歌の効能

民俗芸能研究において，田儛と田舞や，田楽と田楽躍りに，概念の相違があることは，つとに知られている。これと同様に，田植歌と田歌に関しても，そのニュアンスに留意すべきとは，先行研究が喚起したものであった。翻って真澄遊覧記を考えると，たとえば『ひなの一ふし』には，田植歌と田歌とが併用されているが，編者たる菅江真澄に，使い分ける思考があったか定かでない。その思考を探ることは，民俗芸能研究にとっても無益でないが，本稿では便宜上，田歌をも田植歌として表記しておきたい。

ここにいう田植歌は，文字通りに解せば，田植えの労苦を犒うために，歌われるものといえる。とはいえ，真澄遊覧記をみると，農作業という実用的な目的だけに，田植歌を活用していなかったと知れる。たとえば，『花の出羽路』

松藤日記から，出羽国秋田郡搦田村の舞台田を，挙げることができる。

早処女うゑいたれば，ここに泥水の手を突き神楽歌を唄ふ。神唄聞㋕知らぬ丁女は田歌を唄ひて手酬とせしが，いつとなくさる事止みて，田殖唄うたふ早丁女もなしといふ。［菅江 1979: 333］

神事性の高い神楽歌の，代替財として田植歌を奉納していた，というのである。これに基づけば，早乙女が神楽歌より田植歌に精通していたのみならず，田植歌にも神事性が包摂されていた，と読み取りうる。元来，神事と田植歌とは密接だったけれど［山路 1964: 25］，搦田村の舞台田が，この古式を留めたものかどうか，後考を俟ちたい。なお，早乙女により歌謡が奉納されるのが，珍しくなかったのは，『勝地臨毫』秋田郡１における［菅江 1975: 117図］，秋田郡田中村の慣習にも認められる。

かような田植えに際し，早乙女つまり女性に期待が集まったのが，いわゆる田の神信仰に基づくと推定するのは［長島 2010: 40］，妥当なものといえるだろう。もっとも，いかなる田植えにおいても，早乙女が期待されたわけでないのは，『月の出羽路』仙北郡２下にみえる禁忌から把握できる。

春田打耕にも馬を入㋝ず，ううる時も早丁女を入れず。不浄を禁て清らかに作りて…［菅江 1978: 135］

したがって，田植えに臨むとき，田植歌なり早乙女なりに，どのような意味を付与するかは，状況によって変化してくるといえる。むしろ刮眼すべきなのは，こうした意味を付与した人物が，どういう職能を担っていたか，ということではなかろうか。真澄遊覧記からの解法として，『おがらのたき』1807年５月５日条を提示しておきたい。

わらはやみする人は，男にてまれ女と名のりて，ひろまへに，よね，しとぎ，みきなん奉りて田唄の一ふしをうたへば，なごりなう瘧のおつとなん。さをとしのころ見し処なれば，かいはぶきぬること多し。［菅江 1973a: 130］

この一節は，青柳信夫論文によって，はやくから俎上に載せられてきた［青柳 1978: 34］。ここで注目したいのは，田植歌を歌うのが，ワラハヤミつまりオコリの罹患者ということになる。オコリが，マラリアを指していたかは措くとして，その原因が不明であったのは間違いない。当然ながら特効薬はなく，イタコミコなる目の見えない女性によって，呪術的な治療が施されていた［菅江 1973a: 49］。ちなみに肥後国では，農作業に起因する病気になったとき，呪文を唱えるという療法があり，そこでも男性ならば女性と名乗ることになっている［渡辺 2012: 395］。

上述を踏まえると，田楽という農業従事者の営みには，非農業従事者ことに民間宗教者の，影響を想定せざるをえなくなる。これは，法印神楽に修験者が関与している，という事例を引くまでもなく，田楽以外の民俗芸能にもいいうるものだろう。幸いにして真澄遊覧記には，イタコミコや修験者のような，民間宗教者にも筆の及んでいることが，解明されてきた。これら真澄研究の利点を，民俗芸能研究に援用するため，イタコミコに関しては，他日，語りものの

なかで詳論するものとしたい。

２－３　採集から検討まで

いわゆる民俗事象にしろ，それ以外にしろ，菅江真澄が対象を，つぶさに観察しているのは，定評のあるところである。もっとも，菅江真澄が，いかにして田植歌を採集したかと問えば，証すべき材料に乏しいと気づく。先学も，田植えの季節に採訪していないとか［内田 1977: 276］，歌詞が日記に収録されにくいとか［青柳 1978: 34］，といった矛盾を衝いてきた。たしかに，歌詞を採集したいなら，対象に接近する必要があるが，かといって農作業を邪魔するわけにはいかない。菅江真澄が，歌詞の聞き取れない場所から，田植えを見守っていた様子は，『津軽のをち』1797年５月17日条から把握できる。

田子の菅笠のひしひしと星のうつるがごとく，蚊の集く声のやうに遠う近う，歌うたふも聞えたり。［菅江 1972: 235］

これによると，歌詞を採集したのが，田植歌の歌われる季節であった，という一般論を押し通せるものか躊躇する。けだし菅江真澄が，農閑期に宿泊した民家において，田植歌につき話し合った，という推論も成り立つからである。そうであれば田植歌の歌詞が，農繁期の日記には筆録されにくく，『ひなの一ふし』には一括して筆録されているのも，得心のいくものとなる。少なくとも菅江真澄が，田植えの季節が過ぎてから，農業従事者と款談している事実は，『にえのしがらみ』など複数の日記から［菅江 1971a: 401; 菅江 1972: 409］，読み取りうる。

それでは菅江真澄は，採集した事象を，どのようにして検討したのだろう。先学の弁を借りれば，事象の異同を比較しているわけで［中谷 1935: 197］，それは雪中田植えに対してもいいうる［菅江 1972: 53］。ならば菅江真澄は，比較を通して，どのような見通しを立てていたか，２つほど例示してみたい。第一に菅江真澄は，田植踊りの藤九郎につき，異なる地域では弥十郎と呼称される，と繰り返し喚起している［菅江 1971a: 202図; 菅江 1973b: 332］。一読すると，それ以上の趣旨には取れないが，菅江真澄が弥十郎を比較に供したのには，相応の理由があったようである。

陸奥の田植歌とて，書たるを，人の見せたる，弥十郎，あすは大たむのおたうゑだが，しつたかしらぬか，太郎次郎，からすの八番鳥に…［本居 1968: 270］

これは，本居宣長『玉勝間』９巻のなかの，「みちのくの田うゑ歌」の冒頭で，弥十郎を紹介したものとして名高い。菅江真澄は，本居宣長を意識していたといい［磯沼 2005: 10］，わけても『玉勝間』を書写して『玉勝間拾珠抄』を編んでいる。ところが，『玉勝間拾珠抄』９巻では「みちのくの田うゑ歌」が未収録となっており，それが故意だったか過失だったか，追試する術をもたない。むろん，菅江真澄が弥十郎に着目したのは，『玉勝間』の刊行以前からではあるものの，『玉勝間』との接点を探るための，一材料にはなろう。これにより，真澄遊覧記で触れられたり避けられたりした事象は，読者に読解の準備があれば，そうせずにはいられなかった理由が垣間見える，ということができる。

第二に，『奥のてぶり』1794年１月15日条を取り上げたい。

こは去年見しにことならねど，早苗とるにも，此うた，もはらうたへば，かかることをや「風流のはじめやおくの田植唄」と，ばせをの翁の，うべもいひけり。［菅江 1971b: 436］

この一句は，松尾芭蕉『奥の細道』に，典拠があると報告される［門屋 1997: 53］。菅江真澄自身も俳諧を嗜んでおり［石田 1984: 48］，しかも田植えに因んだ一句を，餞に贈られた経験をもっていた［菅江 1971a: 261］。つまり菅江真澄は，昨年と今年とを比較したのち，比較による見解を，自らの創作活動に引きつけようとしている。奇しくも折口信夫は，詠歌と研究とを両立し，また本田安次は，劇作を諦めて研究に専念したが，それらを勘案するに足る問題が『奥のてぶり』には内在されている。

２－４　知識としての田楽躍り

菅江真澄は後半生を，諸国の遊歴に過ごしたが，あらゆる事柄を体験できたわけではない。たとえば，菅江真澄が生きた時代には，すでに衰微していた民俗芸能を，十二分に堪能することはできなかった。『津軽の奥』1795年３月22日条のなかで，陸奥国津軽郡平川村では，かつては田植えのさいに鼓を打ったが，昨今はその音色を聞かなくなった［菅江 1972: 13］，とするのが象徴的な出来事といえる。さらには，古代から隆盛した田楽躍りも，菅江真澄の時代には，属目しにくくなっていたようである。

そうであれば，菅江真澄は，体験によって獲得できない事柄を，いかに填補しようと努めたのか。最善の策として，自分より詳しい人間に，質問するという方法を採った。『軒の山吹』1811年５月条は，常陸国久慈郡にある金砂大祭礼につき，久慈郡入四間村出身の渡辺藤右衛門から聞き書きしたものになる［菅江 1973a: 269］。金砂大祭礼とは，久慈郡天下野村の東金砂神社と，久慈郡上宮河内村の西金砂神社で行なわれるもので，田楽躍りが披露されることで著名である。ただ，『軒の山吹』には，田楽躍りにまでは論及されていないから，渡辺藤右衛門の回答に，不足があったとも推察しうる。

それならば，菅江真澄は，質問による不備を，いかに填補しようと努めたのか。次善の策として，詳細に述べられている，書物を繙読するという方法を採った。『筆のまにまに』８巻は，小宅生順『常陸国誌』の書名を挙げてから，渡辺藤右衛門の談話を載せ，さらに津村淙庵『譚海』を引用する［菅江 1974: 226］。『譚海』巻８は，西金砂神社の金砂大祭礼を扱っており，「田楽の式世上に絶て残らず，只金沙山の神職に伝へ残りたる」［津村 1969: 13］と田楽躍りに言及していた。

菅江真澄は，金砂大祭礼に関する以外にも，田楽のために文献を参看した。『しののはぐさ』の「でんがく」では，谷川士清『和訓栞』から，帥江納言『洛陽田楽記』の一節を孫引きして，往昔の田楽躍りを偲んでいる［菅江 1974: 331］。同じ「でんがく」で，『太平記』に田楽がみえると主張したのは，『太平記』巻５の「関東田楽賞翫の事」［長谷川校 1994: 254］を指してのことだろう。また，『今昔物語集』巻28第７は，雅楽であるべきところ田楽躍りを奉納して，失笑を買ったエピソードになるが［馬淵，国東，稲垣校 2002: 182］，これを菅江真澄は繰

り返し引用した［菅江 1976: 541-542; 菅江1980: 163］。

それから，『風の落葉』３によると，『庭訓往来鈔』の注本に，田楽躍りが近江国滋賀郡上坂本村に由来する，という一文があると説明する［菅江 1980: 70］。たしかに，『庭訓往来』４月５日状往信には，「田楽」の文字がみえるが［山田校 1996: 28］，これに由来を付した注本があったかは，確証が得られなかった。しかしながら，史実かどうかはともかく，田楽躍りの起源が上坂本村にある，という言説は流布していたらしい［藤田，藤田 1902: 527］。ちなみに，この『風の落葉』３の続きで，田楽が神楽に影響を与えた［菅江 1980: 70］，と菅江真澄は判断している。この判断は，『しののはぐさ』のうち，神楽が田楽になった［菅江 1974: 331］，と記述したのと抵触しかねないのに，注意を要する。

先哲も舌を巻いてきたように［松田 1979: 8］，菅江真澄は，新刊から稀本に至るまで，よく閲読し書写していた。それは，高田与清『擁書漫筆』巻４にみえる田楽の記事につき，吉川弘文館刊『日本随筆大成』が欠字にしている箇所さえ［高田 1975: 444］，真澄遊覧記が漏れなく転写しているほどである［菅江 1980: 74］。しかし，同時代の考証家，たとえば喜多村信節『嬉遊笑覧』巻５にみえる田楽の記事と比べれば［喜多村 1979: 198］，菅江真澄に傑出した才能がなかったと知れる。畢竟するに，菅江真澄の才能とは，実地の踏査と，文献の博捜という，両者の調和にあったと捉えられよう。なお，伝承と文献の，いずれに力点を置くべきかが，今日の方法論をもってしても，なお議論の余地があること［飯島 1986: 22］に顧慮しておきたい。

２－５　小迫延年「田楽舞」

小迫延年は，旧暦の３月３日に陸奥国栗原郡小迫村の楽峯山勝大寺で，開催された延年になる。演目には，「献膳」「獅子舞」「御山開き，御法楽」「入振舞」「飛作舞」「田楽舞」「馬上渡し」がある。菅江真澄の時代は，「馬上渡し」のつぎが「田楽舞」だったが，1975年から曲順が転倒している［千葉 1994: 12］。本田安次の芸能分類によれば，延年は渡来芸・舞台芸に属するが，小迫延年「田楽舞」は，田楽躍りの系譜を継いでいるといえよう。なお，「早稲田派」と指呼される研究者うち，本田安次は1950年に［本田 1998: 65］，本田安次に師事した渡辺伸夫は1963年に［渡辺 1978: 77］，それぞれ採訪してきた。

現在の小迫延年は，国の重要無形民俗文化財に指定され，新暦の４月第１日曜日に，宮城県栗原市の白山神社で開催されている。しかるに，2011年３月11日に東日本大震災が発生し，栗原市は最大震度７を観測して，同年の祭典は中止となった。そこで筆者は，栗原市金成総合支所に問い合わせたところ，2012年は４月１日に実施するよしなので，見学することにした。最寄りの沢辺駅は，くりはら田園鉄道の廃線により利用できなくなったため，宮城県仙台市に前泊し，そこから高速バスで移動する。以下，小迫延年「田楽舞」につき，筆者の実見と，筆者の撮影したビデオから，概要を取りまとめる。

小迫延年は，午後１時から開始された。「田楽舞」は，６番目の演目として，２時28分から７分かけて舞われる。扮装は，花篭をかざした素面に，白張装束，白足袋，草履。花篭をかざしつつ，右手に白木の棒，左手に白幣を持つ。

図　小迫延年「田楽舞」
（宮城県栗原市金成，2012年４月１日筆者撮影）

壮年男子による８人舞で，舞人の所作は同じである。８人は，１人ずつ土壇に登り，全員が登り終えると，それだけで立錐の余地がなくなる（図）。歌詞や詞章はなく，ただ舞人は上体を浮き沈みさせながら，ゆっくりと右回りに３周する。冷静に鑑賞すれば，白張装束による無言の舞いは，異様な光景に映るはずだが，その観客も舞い終わりとともに，花篭の花を争奪するべく浮ついている。土壇を回り終わると，８人は土壇の中心に集まり，中心を向いて蹲踞する。にわかに８人は，花篭を後方に放擲し，騒然とするなか観客は，我先にと花を奪い合う。筆者は，横転するビデオカメラを抱き留めるので精一杯だったが，そこには花を獲得して，頬笑む観客が録画されていた。

菅江真澄は，いわゆる平泉文化圏に残る，中尊寺延年と毛越寺延年と小迫延年を踏査し，そのいずれでも田楽躍りを実見している。この３件を総括したのが，『しののはぐさ』で，

いにしへのあそびとかはり，風俗みなみだれたれど，ただ田楽の形のみぞ残りたる。［菅江 1974: 331］

という結論に達した。かかる経年変化は，菅江真澄の訪れた以後にも，生じてきたらしい。小迫延年に臨み，筆者の師事する渡辺伸夫に相談したところ，「田楽舞」の囃子は，菅江真澄の時代から変化している，という指導を受けた。たしかに，『かすむ駒形続』1786年３月３日条には「ささら三人，太鼓三人」［菅江 1981: 28］とみえるが，筆者が確認しえたのは横笛だけである。のみならず，1994年時点では，「田楽舞」の持ち物が，右手に白幣，左手に白木の棒だったといい［千葉 1994: 13］，つまり逆転したことになろう。もっとも，『かすむ駒形続』には「いつ色の紙にぎて二本」［菅江 1981: 28］とみえ，いずれが正か判じがたいところではある。

おわりに

菅江真澄の見聞した田楽につき，その梗概および論点を，明らかにしてみた。本稿では，田楽という民俗芸能に限定したが，実際の真澄遊覧記には，その周辺に展開する事象も，幅広く書き留められている。たとえば，穀物を粉砕する石臼を写生したり［菅江 1973b: 270図］，そうした臼挽歌の歌詞を筆録したり［菅江 1971a: 164］したのは，よく知られる。『桜がり』下巻には，山肌の雪解けを見計らって，田植えをはじめる［菅江 1974: 281］，という慣習も紹介された。ほかにも，カキツバタの方言が「早乙女花」であり［菅江 1972: 142］，コブシの方言が「田耕桜」であり［菅江 1973a: 110］，ホトトギスの方言が「田植鳥」であるのも［菅江 1971a: 382］，穀物栽培を前提にした説明といえる。なお，これらの一部には，長島淳子論文［長島 2010: 37］や菊池勇夫論文［菊池 2011: 228］によって，先鞭がつけられてきた。

したがって菅江真澄は，民俗芸能とそれ以外の民俗事象に，境界を見つけず作らなかった，ということができる。それならば，真澄遊覧記には，田楽に分類しうる民俗芸能が，平等に掲載されていたか，といえばそうではない。真澄遊覧記でも，とりわけ日記よりも地誌において，田植歌にまつわる記事が，低調となる傾向があった。この傾向は，神楽の場合には，日記よりも地誌に頻出することからして［星野 2012: 190］，相対的に信頼できると思われる。

菅江真澄の地誌には，秋田藩が関与していたと伝えられ，その関与の実態には，不熟の議論が少なくない［高橋，伊藤 1996: 17］。そうではあれ，地誌が日記に比べて，公的な性格が強いのは自明であって，こうしたなか田楽は，排除されるべき対象と判断されたようである。そもそも，田楽躍りが雅楽の代用品たりえないとは，『今昔物語集』巻28第７にみえるエピソードで，かかる価値観は菅江真澄の熟知するところだった。以上によると，菅江真澄は田楽に対し，私的には関心を寄せつつも，公的には言及を控える，という二重基準を有していたと考えられる。換言すれば，真澄遊覧記と総称される著作群のうち，日記と地誌には温度差があった，という例証ともなろう。

なお，真澄遊覧記に描かれた田楽のなかにも，積み残した論点があるので，杜撰ながら列挙してみたい。第一に，田植歌の歌詞構造の分析，なかんずく比較を試みる，という点について。かかる分析は，浅野建二論文［浅野 1979b: 98］や森山弘毅論文［森山 1993: 20］に，まとまった成果があるため，本稿では割愛した。第二に，『奥のうらうら』1793年５月20日条にみえる，稗田でも稲田のように田植歌が歌われていた［菅江 1971b: 336］，という点について。奥羽地方には稗田が多かったから，稲作農耕文化からは見落とされる部分がある［菊地 2006: 58］，という菊地和博論文を講読するうえで有用となろう。第三に，農村社会における田楽が，いかなる役割を果たしていたか，という点について。たとえば田中正造は，その日記の1893年９月条で，「豊年踊りを見れバ団体力の強弱をさとるによし」［田中 1977: 348］と看破した。

第三に関して，現代の農村社会では，機械化や合理化が進み，ゆえに田楽の役割は，加速度的に忘却されている。実際，真澄遊覧記に描かれた田植踊りに即しても，現在では衰退してしまったという報告もなされてきた［門屋 1997: 52］。それでも，存続している田植踊りがあるなら，たとえば民俗芸能大会などで披露することにより，当該保存会にとって，どのような効果が期待できるのだろう。その効果は，かつて五穀豊穣を祈念したときと比べ，差違があるのか。差違があるならば，芸態が変容しなくても，得られる効果は変容しうることになるから，これは民俗芸能研究ひいては演劇研究に資するところ大といえる。

〔投稿受理日2012.7.23／掲載決定日2013.1.24〕

参考文献

青柳信夫　1978.「菅江真澄と秋田の民謡・芸能」『わらび』205，pp.31-35
赤坂憲雄　2002.「小正月の風景」『東北学』１（7），pp.303-329
浅野建二　1979a.「菅江真澄と民俗芸能」『文学』47（8），pp.17-29
浅野建二　1979b.「菅江真澄と民俗芸能」『文学』47（10），pp.98-110
浅野建二　1980a.「菅江真澄と民俗芸能」『文学』48（1），pp.91-103
浅野建二　1980b.「菅江真澄と民俗芸能」『文学』48

(2)，pp.55-69
新井恒易　1981.『農と田遊びの研究』上巻，明治書院
飯島吉晴　1986.「中山太郎の民俗学」『日本民俗学』164，pp.20-25
石田冲秋　1984.「菅江真澄の旅と俳諧」『俳星』復刊39（6），pp.46-50
磯沼重治　2005.「真澄の観察と記録，実感実証の学」『真澄学』２，pp. 6 -19
稲雄次　1991.『カマクラとボンデン』再版，秋田文化出版
内田武志　1953.「菅江真澄の越後路」『高志路』145，pp. 5 -10
内田武志　1977.『菅江真澄全集』別巻１，未来社
門屋光昭　1997.「菅江真澄と盛岡藩・仙台藩領の民俗芸能」『日本文学会誌』９，pp.46-59
菊池勇夫　2011.「五月鳥と早乙女花」『真澄学』６，pp.228-243
菊地和博　2006.「東北地方の歴史風土と田植踊りの本質」『日本歌謡研究』46，pp.51-60
菊地和博　2011a.「菅江真澄の「八戸田植踊」と豊作祈願の芸能」『真澄学』６，pp.92-107
菊地和博　2011b.「菅江真澄の江戸期「胆沢郡徳岡田植踊と豊作祈願芸能」」『東北文京大学東北文教大学短期大学部紀要』１，pp.65-81
喜多村信節　1979.『日本随筆大成』第２期別巻２，吉川弘文館
小作寿郎　1994.「菅江真澄の見た小正月」『隣人』10，pp.25-35
後藤麻衣子　2012.『カマクラと雪室』岩田書院
小林存　1940.「民俗をりふし話」『高志路』66，pp.28-33
志田延義　1937.「東北地方の民謡」『民謡研究』２（1），pp.43-49
蔀関月著;原田幹校　1919.『大日本名所図会』第１集第４編，大日本名所図会刊行会
渋谷清志　1953.「長良の土手の田植唄」『高志路』146，p.25
菅江真澄著;柳田国男校　1930.『ひなの一ふし』郷土研究社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編　1968.『菅江真澄遊覧記』５，平凡社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1971a.『菅江真澄全集』第１巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1971b.『菅江真澄全集』第２巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1972.『菅江真澄全集』第３巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1973a.『菅江真澄全集』第４巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1973b.『菅江真澄全集』第９巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1974.『菅江真澄全集』第10巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1975.『菅江真澄全集』第５巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1976.『菅江真澄全集』第６巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1978.『菅江真澄全集』第７巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1979.『菅江真澄全集』第８巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1980.『菅江真澄全集』第11巻，未来社
菅江真澄著;内田武志，宮本常一編;内田武志解題　1981.『菅江真澄全集』第12巻，未来社
高田与清　1975.「擁書漫筆」『日本随筆大成』第１期12，吉川弘文館，pp.307-477
高橋秀夫，伊藤信　1996.「文政九年真澄仙北郡調査のさいの一つの問題」『秋田工業高等専門学校研究紀要』31，pp.17-21
田口昌樹　1999.『「菅江真澄」読本』３，無明舎出版
田口昌樹　2002.『「菅江真澄」読本』５，無明舎出版
田中正造著;田中正造全集編纂会編　1977.『田中正造全集』第９巻，岩波書店
千葉雄市　1994.「小迫の延年」『民俗芸能』75，pp. 6 -15
津村淙庵著;竹内利美校　1969.「譚海」『日本庶民生活史料集成』第８巻，三一書房，pp. 3 -278
鳥越文蔵　1996.「開催にあたって」『本田安次展』早稲田大学演劇博物館，p. 1
直江広治　1979.「菅江真澄と鳥追い行事」『菅江真澄全集月報』11，pp 4 - 6
長島淳子　2010.「菅江真澄のみた農村女性たち」『真澄学』５，pp.33-50
中道等　1928.「奥州八戸の舞踊「ゑんぶり」略解」『民俗芸術』１（4），pp.70-76
中谷治宇二郎　1935.『日本先史学序史』岩波書店
野本寛一　1993.『稲作民俗文化論』雄山閣出版
長谷川端校　1994.『新編日本古典文学全集』54，小学館

藤田松阿弥，藤田清阿弥著;近藤瓶城編　1902.「田楽法師由来之事」『改定史籍集覧』第16冊，近藤活版所，pp.527-550
星野岳義　2012.「菅江真澄の見聞した民俗芸能」『社学研論集』20，pp.187-202
本田安次　1960.『図録日本の民俗芸能』朝日新聞社
本田安次　1990.『日本の伝統芸能』錦正社
本田安次　1995.『本田安次著作集』第８巻，錦正社
本田安次　1998.『本田安次著作集』第16巻，錦正社
松尾恒一　2005.「延年を開く」『真澄学』２，pp.75-89
松田修　1979.「名のり・「奥州征伐記」・「刀」」『菅江真澄全集月報』11，pp.6-9
馬淵和夫，国東文麿，稲垣泰一校　2002.『新編日本古典文学全集』38，小学館
本居宣長著;大野晋編　1968.『本居宣長全集』第１巻，筑摩書房
森山弘毅　1990.「菅江真澄採録歌謡」『釧路公立大学紀要』人文・自然科学研究２，pp.43-60
森山弘毅　1991.「菅江真澄採録歌謡」『釧路公立大学紀要』人文・自然科学研究３，pp.27-51
森山弘毅　1992.「菅江真澄採録歌謡」『釧路公立大学紀要』人文・自然科学研究４，pp.35-74
森山弘毅　1993.「鄙廼一曲注釈ノート」『釧路公立大学紀要』人文・自然科学研究５，pp.1-25
森山弘毅　1996.「鄙廼一曲注釈ノート」『釧路公立大学紀要』人文・自然科学研究８，pp.1-35
森山弘毅　1997.「鄙廼一曲注釈ノート」『釧路公立大学紀要』人文・自然科学研究９，pp.1-34
森山弘毅　2002.「菅江真澄の歌謡における虚と実」『真澄研究』６，pp20-41
柳田国男　1928.『雪国の春』岡書院
山路興造　1964.「田植楽のこと」『日本民俗学会報』35，pp.22-34
山田俊雄校　1996.「庭訓往来」『新日本古典文学大系』52，岩波書店，pp.1-109
渡辺伸夫　1978.「小迫白山神社の延年」『祭りと芸能の旅』１，ぎょうせい，pp.76-79
渡辺伸夫　2012.『椎葉神楽発掘』岩田書院